

SAMPLE サンプル 試読

墮ちる

AとV

あんぷらぐ
荒縄工房

2

萌子は、どこまでも
水絵と一緒に
墮ちてみたい……

SAMPLE サンプル 試読

S
M
小説

墮ちる

A
と
V

2

あんぷらぐ著

荒縄工房・発行



SAMPLE サンプル 試読

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より「あんぷらぐど」名義で独自の自虐的S M小説、伝奇S M小説などを発表。二〇一九年「あんぷらぐ」に改名。東京在住。

目次

開く花	仕打ち	火炙り	縄人形	淫な花	ペット	恋と愛	縄歩き	再びの	主な登場人物	これまで
3	3	2	2	1	1	9	5	8		6
7	2	7	2	7	3	3	4			
7	SAMPLE サンプル 試読									

奥付	爆虐行	堕ち牝	淫虐穴
5	5	4	4
7	2	6	2
1			

SAMPLE サンプル 試読

これまで

前作『墮ちるAとV 1』

水絵の同僚たちによるいじめは、水絵自身の発する独特の雰囲気と、どこまでも従順に振る舞う姿に触発されて、エスカレートしていく。見知らぬ男たちへの肉便器奉仕、輪姦……。会社の近隣の町中で展開され、水絵はひたすら虐待を受け入れていく。

ケイコたちは自分たちで終わらせることのできないところまで進んでしまった。

主な登場人物

水絵 関わる者たちを狂わせる被虐に生きる女。

萌子 水絵と同じ会社に勤める。

ケイコ、遼子 萌子と共に水絵に関わった同僚。

大川部長 水絵たちの務める会社の上司。

奥田、富ヶ谷、留岡 水絵を飼育するアパートの住人。

再びの

明けて、一月の月曜日。昨日、初場所が開幕し、両国は力士を見る人たちで賑わっている。

そんな喧噪から遠く離れた場所に、水絵の住むアパートがあつた。地理的にはスカイツリーに近いが、近すぎて周囲の建物に遮られ、その姿を見ることはできない。

水絵は倉庫の仕事を終えると、寄り道せずここへ帰って来る。彼女の足で十五分はかかる。そこの手前まではしばらく広い道に面しているものの、すぐに住宅など代わり映えない景色の中に埋没していき、コ

SAMPLE サンプル 試読

ンビニの角を曲がると、自分がどこにいるのかわからなくなるほど暗い街になる。

冬は夜が早い。夕暮れ時も終わりが迫っていた。

萌子は水絵のあとをかなり離れて、こっそりとあとを付けた。こうなると距離を詰めないと見失う。声をかけられるほど接近する瞬間もあつたのだが、水絵は振り向きもしない。

路地に面した陰気なアパート。背丈ほどのブロッケンに囲まれている。道路から奥へのびる各部屋の入り口と電気、水道のメーター。プロパンガスのボンベ。

水絵はその敷地に入ると、手前にある錆びた鉄の階段をのぼり二階の部屋へ入った。しかし、ほとんど間

を置かず、また出てきた。

あたりは影が多くなり、闇に包まれつつあった。

階段の上の灯りに照らされて、水着姿の水絵がいた。白いふち取りがある紺色のワンピース型。真つ白な肌。にピチピチの水着が食い込んでいる。そもそもサイズが小さいのだ。トントンと階段を下りてくる。

股間に縦の溝がくつきり見えている。

鼻が高く見える。錯覚ではない。シンクロナイズドスイミングの選手がするようなクリップで鼻を塞いでいる。

手にしている白いスイムキャップをしつかりと頭につけると、ゴーグルまでかけた。

SAMPLE サンプル 試読

こんなところにプールなどないのに。

そのままブロック塀の影に消えた。

萌子はその様子をドキドキしながら見ていた。ケイコや遼子になにを言われるかわからなかったが、どうしても水絵のいまを確認したかったのだ。

狂気のような年末のあの夜。両国の居酒屋が建ち並ぶ繁華街の路地で、水絵にアルコール度数の高い酒を振りかけて燃やした。

あの光景を萌子は忘れられない。あんなことをされた水絵が、退院してからなに食わぬ顔をして倉庫勤務を続けている。彼女の女性として大事な部分には、それまでに何十本ものペニスが押し込まれ、何リットル

もの精液を注ぎ込まれたはずだった。

肌を黒く汚しながら小雨の下で、男たちにひたすら体を与え続けていた水絵。

彼女がどうなっているのか、体の隅々まで確認したくてしようがない。その衝動と毎日戦っていたのだ。

水絵の姿がブロック塀の影になってしまったので、萌子は仕方がなくさらに近づいてアパートの敷地内を覗き込む。

階段の横には、ブロック塀との間に細い道があった。街灯とアパート入り口の灯りに照らされている。

「ほしいか。ん？」

男の声がして、萌子は緊張する。

「あうあうあう」

水絵らしい甘いあえぎ声。

階段の横を抜けると、黒ずんだブロック塀に囲まれた陰湿な庭があつた。

部屋の灯りが白く庭を照らし出す。

細長い庭の中央に水絵は膝をついていた。

ペットボトルの上半分を切断したものを口にあてている。彼女の横には、五百ミリから二リットルまで、同様に底を切り取られたペットボトルが転がっていた。

大型犬にでも使うようなゴツイ黒い首輪。そのチェーンは、ささくくれた材木の杭につながっている。廃材で作られたらしい粗末な犬小屋がそこにある。

小屋には「水絵」という文字に×がつけられて、「便所犬」と訂正されていた。

中年の男は一階の部屋からサンダルで庭に出てきて、水絵に向かって放尿している。

ザーツとペットボトルを打つ音が響く。

思わず周囲を見渡すが、この庭を覗き込めるのはアパートの住人だけのようだった。ブロック塀で路地側は遮られ、ほかの二方向は工場のような窓のない壁や、高い植木に遮られている。

黄色っぽい液体が溜まっている。しかしあふれることはない。

水絵は飲んでいる。喉が上下している。

「危なかったよ。もう少し帰りが遅かったら、しちやうところだった。ずっと溜めておいてやったんだぜ」
中年男はそう言いながら、長い放尿を続けている。
水絵の水着はまったく濡れていない。喉が上下し、ゴクゴクと飲んでいゝる。

鼻を閉じているので息もできないはずだ。

「はー」

いっきに飲み終わると、ようやく水絵はペットボトルを口から離した。

水着には小さな穴が開けられていた。拷問に晒されたとはいえ、いまだかわいらしい乳首が、ちよこんと突き出ている。最初にカラオケルームで見たときより

も大きくなつて色も濃くなつていたとしても。

そして股間にも穴が開けられていた。ぴったりと閉じて膝をついているので、皺が寄っているようにしか見えませんが、その陰は間違いなく彼女自身の肌だと萌子は思う。股間に見えた縦の溝は、食い込んだ水着ではなく、切れ目だったのだ。

ケイコたちに強いられているわけではない。終わつたことなのだ。それでも、アパートに戻れば便所犬になつている……。

水絵は言葉は発せず、口を大きくあけて飲み干したことを示している。

男はそれを眺めながら、タバコに火をつけた。

「今日は仕事があつたんで、少し稼げたんだよ。いつもよりはいい物を食ったから、明日の朝は楽しみにしてろよ」

水絵は舌を出し、うなづく。

退院直後はふっくらとしていた体も、またスリムに戻りつつある。もつとも、いまの行為でお腹はぽっこりと膨らんでいたが。

こんな生活をしていたら、死んでしまう……。

萌子はゾツとした。

水絵の墮落が止まらない。それどころか、ケイコや遼子が見ていたAV作品にもなかつたような、恐ろしい領域に踏み込んでいる。

ポンと肩を叩かれ、萌子は「ひっ」と悲鳴を上げてしまった。

真後ろに大川部長がいた。

「なにしてるんだ、こんなところで」

その声にも男も水絵も気づいた。

「あ、わたし……」

萌子は背後から首に腕を回され、両手首を掴まれて庭に連れ込まれた。

「すみません。邪魔するつもりじゃないんで」と大川部長はその強面の外見に似合わず穏やかに話す。

「このアパート、管理を頼まれているんでね」

水絵の住む場所を手配したのは大川部長だった。

ケイコたちに支配されていた頃、水絵は遼子のルームメイトだった。退院後は、「被害者」であるケイコ、遼子、萌子から一定の距離を置くために、「加害者」である水絵はここに住んでいる。身元引受人も部長だった。

部長が来ようが萌子が来ようが、水絵はまったく動じない。

「はあああ」

舌を出して犬のように口で息をしている。

「どうですか。奥田さん。この便所犬は」

部長は水絵を無視して住人に尋ねる。

「ええ、すごくおとなしくて、かわいいですよ。いま

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇二二年十一月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐ（あんぷらぐど）（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 SM研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。

SAMPLE サンプル 試読